○議長（松尾徹郎君）

中村議員。

○１５番（中村　実君）

上越市のほうでは、もう既にね、何年も前からこれは始めてるんですよね。セメントだとか石灰だとかっていうのを改良土砂と混ぜて、それを良質なものを埋め立てしてるということなんで、市のほうでは、上越市のほうでは、よく詳しく私知らないんですけど、やっぱりチケットを切ってるらしいんですよね。搬出するときもチケット、持ってくるときも市のチケット、それを使って、間違いなく土砂をそこへ戻してるかっていうことをチェックしてるそうなんです。その辺またしっかりと、上越の情報を聞きながら使っていただければ土砂も減ると思うんですよね。当然、糸魚川市でその改良土をやるところ造るってわけにもいかないんで、民間にやはり、上越の場合は民間で２か所やってるらしいんですよね。それも民間に、本気でやるんだということになれば、民間も設備投資しなきゃいけないんで、そこそこの金額がかかるということを聞いております。ちょうど今、土石流、熱海の土石流もちょうど２年がたって、引っ越しができるということでありますので、そういうことが起こらないように土砂のやり場をしっかりと考えていただきまして、安全な糸魚川市にしていただければというふうに思います。

ありがとうございました。

○議長（松尾徹郎君）

以上で、中村議員の質問が終わりました。

暫時休憩いたします。

再開を１１時５分といたします。

〈午前１０時５８分　休憩〉

〈午前１１時０５分　開議〉

○議長（松尾徹郎君）

休憩を解き、会議を再開いたします。

次に、和泉克彦議員。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。〔１３番　和泉克彦君登壇〕

○１３番（和泉克彦君）

和泉克彦でございます。

発言通告書に基づきまして、１回目の質問をいたします。

１、地域公共交通の現状と課題、地域観光振興について。

新型コロナウイルス感染症が、２類相当から５類に移行したことにより、コロナ禍よりは交流人口、特に外国人の方々が増えています。この夏のまれに見る厳しい暑さにもかかわらず、多くの方々が、様々な交通手段を利用して、この糸魚川市を訪れています。中でも、多くの方々が、北陸

新幹線をはじめ、大糸線やえちごトキめき鉄道などの鉄道を利用されているところを度々目にしたことから、糸魚川市の観光振興に寄与したものと思われます。そこで、以下について質問いたします。

(1) 来春に控えた北陸新幹線、敦賀延伸に向けた当市としてのこれまでの新幹線利用促進の現状と今後の課題について伺います。

(2) ８月１９日から２１日の３日間にわたり、大糸線ファンミーティングが開催されましたが、このイベントの様子や結果を、大糸線存続に向けてどのように捉えているでしょうか、伺います。

(3) えちごトキめき鉄道の観光急行やえちごトキめきリゾート雪月花を多くの方々が利用されていますが、地域観光振興という視点で、この現状をどのように捉えているでしょうか、伺います。

２、生涯現役社会に向けた高齢福祉施策について。

現在、日本全体が超高齢社会に突入しています。６５歳以上の人口は、約３０年前の平成６年には１４．１％でしたが、昨年１０月には２９．１％になりました。つまり、ここ３０年で６５歳以上の人口のシェア（占有率）は倍増し、日本人の３人に１人がシニア層になる社会が到来しつつあります。これは日本全体の話ですので、都市部より若者が比較的少ない地方では、より激しい変化が起きています。当市では、現在、６５歳以上の人口のシェアは４０．９５％であり、約２．５人に１人がシニア層です。

このような超高齢社会において、シニア層の方々が「幸福に生き切ることができるかどうか」ということは、とても大切なことではないでしょうか。もちろん、「幸福」と言っても、いろいろな考え方があると思います。病気で苦しむことなく体が健康で、「生きがい」があるかどうか。これが重要なのではないでしょうか。ただ、「病気の人が必ず不幸」というわけではありませんが、体が苦しいのに、幸福感を維持するのはなかなか大変なのではないかと思われます。また、体が健康でも、お年寄りだからということで、生きがいを奪われてしまえば、これも苦しいのではないでしょうか。ですから、シニア層の方々の幸福の実現に向けて、「健康」と「生きがい」というものを大切にすべきだと考えております。

現在、政府も「女性も男性も、若者もお年寄りも、障害や難病のある方も、家庭で、職場で、地域で、あらゆる場で、誰もが包摂（一定の範囲の中に包み込むこと）され、活躍できる社会『一億総活躍社会』の実現」を進めております。ですから、当市においても、この「生きがい」というものを、もっと事業の柱とし、「生きがい」の最大化というものも事業で目指していくべきではないでしょうか。そこで、以下について質問いたします。

(1) シニア層向け事業を通じた「生きがい」を育める地域づくりについて。

① 国が推進する「『一億総活躍社会』の実現」に向けて、当市として、シニア層の活躍において、特に重視している事業等について伺います。また、その達成に向けて行っている事業とその評価について伺います。

② 就労支援も含めた高齢福祉施策において、シニア層の方の幸福の実現に向けて、「生きがいを育む」ことが重要だと思いますが、行政としてはどのように考えておられるのか伺います。

③　当市におけるシニア層の方々の活躍に向けて、「生きがいの最大化」を目指し、関連事業において、その達成に向けた事業を設定するのはいかがでしょうか。

④　当市においても、少子高齢化により、さらに歳出圧力が高まると考えられますが、シニア層向け事業の「持続可能性」をどのように高めていこうと考えておられるのか、その計画について伺います。

(2) シニア層の就労・社会参加支援事業について。

①　当市における６５歳以上の方の就業状況はいかがでしょうか。また、年代別、性別、業種別、収入別等での分析は行っていますでしょうか。

②　当市において、シニア層の就労ニーズが高い業種、また、企業側からのニーズについて伺います。

③　希望するシニアの方を企業に１週間から２か月程度の短期派遣を行うことで、企業とシニア層のマッチングを図る制度を開設するのはいかがでしょうか。

④　当市において、シニア層の新しいスキルの習得を支援する事業について伺います。

(3) シニア層の福祉・介護事業について。

①　当市において、要支援・要介護の状態改善を目指すような取組について伺います。

②　当市において、介護事業でシニア層の「生きがい」を育めるような取組について伺います。

③　当市においても、介護事業所で就労・社会参加活動が可能となるような取組や啓発活動等を進めていくべきではないかと思いますが、いかがでしょうか。

④　当市における介護事業で、「生きがいを最大化する」という視点に立って、取り組むべきではないかと思いますが、いかがでしょうか。

⑤　当市においても歳出圧力が高まる中、介護事業の「持続可能性」を高めるための取組について伺います。

以上で、１回目の質問を終わります。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

米田市長。　〔市長　米田　徹君登壇〕

○市長（米田　徹君）

和泉議員のご質問にお答えいたします。

１番目の１点目につきましては、敦賀延伸に関連するＰＲイベントに参加するなど、当市への誘客活動を行っているところであり、今後とも、糸魚川駅や大糸線を利用していただくため、白馬バレーとのさらなる連携による魅力の発信が必要であると考えております。

２点目につきましては、講演会やミーティングを通じて、いただいた提案を沿線自治体やＪＲ等と共有し、さらなる活性化につなげてまいります。

３点目につきましては、市内の駅から観光施設や飲食店等を周遊していただくことによって、地域経済の活性化につながっていくものと考えております。

２番目の１点目の１つ目と２つ目につきましては、定年退職後の就業や社会参加が高齢者の生きがいにつながるものとして、シルバー人材センターや老人クラブ活動への支援などを行っており、

いずれも地域貢献につながっていると評価いたしております。

３つ目につきましては、より生きがいを感じていただけるよう今後も支援してまいります。

４つ目につきましては、フレイル予防を中心とした介護予防事業や高齢者の社会参加の促進に、引き続き努めてまいります。

２点目の１つ目につきましては、就業率は２４．３％となっており、収入等を除いて状況は把握できております。

２つ目につきましては、運輸、清掃等、サービス、事務、輸送、機械運転等が上位となっております。

また、企業側の求人は年齢制限を設けることはできませんが、一定の就業実績が見られることから、ニーズはあるものと捉えております。

３つ目につきましては、商工会議所でシニア人材のシェア事業を検討しておりますが、現状では、企業側のニーズや人材派遣法等の課題があるとお聞きいたしております。

４つ目につきましては、市の資格試験受験料補助制度や、ハローワークが実施している公共職業訓練等は、働こうとする人全てが対象となっております。

３点目の１つ目につきましては、介護事業所において状況の維持・改善のため、運動機能向上や栄養改善、口腔機能向上などに取り組んでおります。

２つ目と３つ目につきましては、介護現場において、補助的な業務を高齢者が担う事例もあり、今後も促進してまいります。

４つ目につきましては、介護現場では、介護を受ける方が自分の能力に応じて自立した生活を送れるようにという視点でサービスが提供されており、これも生きがいにつながるものと捉えております。

５つ目につきましては、２番目のご質問でお答えいたしたように、フレイル予防を中心とした介護予防事業や高齢者の社会参加の促進に、引き続き努めてまいります。

以上、ご質問にお答えいたしましたが、再度のご質問によりましては、所管の部・課長からの答弁もありますので、よろしくお願いいたします。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

それでは２回目の質問をいたします。

地域公共交通についてですが、折よくおととい、ＪＲ西日本及び東日本から、北陸新幹線の金沢から敦賀延伸、開業に伴う運行計画の概要が発表されました。このことにより、沿線の上越地域からも、関西圏からの観光誘客に弾みがつくとの声が上がっているとの報道がありました。

そこで、敦賀延伸に関連するイベントや糸魚川市としての誘客活動として、具体的な取組についてお聞かせください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

大西商工観光課長。　〔商工観光課長　大西　学君登壇〕

○商工観光課長（大西　学君）

お答えいたします。

今年度は、北アルプス日本海広域観光連携会議としまして、この週末に行われます敦賀まつりに、ＰＲのために出展したいなというふうに思っております。

また、来年３月１６日に予定されております敦賀駅開業イベントにも参加し、ＰＲのほうを行ってまいります。

また、併せて、北陸新幹線駅１３市で構成されます北陸新幹線停車駅都市観光推進会議としまして、今年は大阪駅、金沢駅のデジタルサイネージを活用したプロモーション活動のほうを考えておりますし、また、構成されております１３市で統一したポスターを作成しまして、事業展開のほうを図ってまいりたいというふうに思っております。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

どんどんＰＲ活動をお願いしたいところであります。

それで北陸新幹線のはくたかの運行ですけれども、時刻表等を見ると、夏、お盆の帰省の頃ですけども、臨時のはくたかが運行されてるんですが、それが、糸魚川駅と黒部宇奈月温泉駅通過というダイヤが組まれています。これはあくまでも臨時ですし、近くの飯山駅が定期運行のはくたかが１日に数本止まらないというダイヤが組まれてますが、その代替による運行だというふうに見て取れるんですけども、今回の運行計画を見ますと、現在も東京・金沢１４往復の本数が、敦賀と金沢には行き先は分かれますが、１４本確保されてますし、朝と最終の長野・金沢間のはくたかも維持されていると。あわせて、当糸魚川駅も全列車停車ということで、私自身としてはほっとしているところであります。

あわせて、本日の新聞報道にも米田市長のコメントが寄せられていて、全列車が停車ということで喜ばしいというコメントもいただいております。そういう、これ減らされていくと大変なことになるわけで、ぜひ先ほど商工観光課長おっしゃったＰＲ活動をどんどんしていっていただければなというふうに思います。

次に、北陸新幹線とセットで考えなければいけないというのが、ＪＲ大糸線だと思います。

そこで、先日行われました大糸線応援隊ファンミーティングでの講演会や、ミーティングでの具体的にはどのような提案とか声が寄せられたのか、お聞かせください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

五十嵐都市政策課長。　〔都市政策課長　五十嵐博文君登壇〕

○都市政策課長（五十嵐博文君）

おはようございます。

お答えいたします。

応援隊の皆様からは、本当に様々なご意見をいただきました。大糸線の歴史ですとか車窓からの景色を、車内放送を使って、お客様のほうに楽しんでいただくというようなこともしてはどうかと

か、あと海と山、カニとヒスイというのを一つのパッケージにして、関西方面のお客様にちょっとアピールしていってはどうか。あと鉄道ファンとか、外国人、インバウンドの方、あと自転車登山、そういう切り口を明確にしたターゲットの絞り込みによる売り込みが必要ではないかというようなご提案をいただきました。

また、ある方からは、観光利用だけでは駄目でしょうと。私たちが大糸線が必要であるんであれば、もうちょっと残すための取組とか手法とか、そういうところを真剣に議論すべきなんではないのかと。そういうようなご提言をいただいたところでございます。

鳥塚社長のほうからは、鉄道であることの優位性、鉄道ファンに訴える鉄道、そういう人を集める魅力あることなんですよというようなご講演をいただいたところでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

現在、大糸線応援隊は３，０００名を超えているとのことですが、ファンミーティングということですから、大糸線に熱い思いを寄せる鉄道ファンの方々の声がメインになると思われます。今ほど答弁にありましたことも踏まえまして、併せて、やはり大糸線沿線の住民の方々が、この大糸線の必要性についてどのような意見をお持ちなのかということを再度確認する時期に来ているのかなというふうに思っております。ぜひご検討いただければと思います。

それでは、ファンミーティングではいろんな提案、お声を頂戴したということですけれども、実際にそれをＪＲとか国に対してどのように伝えていくのか、お聞かせください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

五十嵐都市政策課長。　〔都市政策課長　五十嵐博文君登壇〕

○都市政策課長（五十嵐博文君）

お答えいたします。

まずもっていただいたご意見について、大糸線の同盟会、振興部会のメンバーとは、まずは共有いたします。その上で、私たちだけでもできる取組については行っていくという心構えで取り組んでまいります。その上で、ＪＲ西日本に対しては、隊員から寄せられた、いただいた声というのは、ＪＲの鉄道の路線の活性化のためなんですよということも、しっかりと伝えていかなければいけないというふうに思っています。

あと、国のほうに関しては、年間に数回実施しております国交省ですとか地元選出の国会議員への要望のほか、ここはやはり新潟、長野の両県のお力も借りるというか連携をしまして、大糸線の確保について、このファンミーティングでの隊員の思いとかそういうのを、要望だけじゃなくて、あらゆる機会を通じて、私ども事務方でもいいですし、あと市長、副市長のほうから伝えていくということが必要であるかというふうに思っております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

ファンミーティングでの提案というのは、やはり観光路線としてのものが多いということを改めて認識しました。そのことについては、以前からほかの議員の方々とか、私も異口同音に観光路線としての利用について述べてきたところではあります。それだけ大糸線には魅力ある観光資源がたくさんあるということ、これが市民だけではなくて、市民以外の全国の方々もそういうことを感じておられるということだと思います。

そこで、観光路線として重点を置いて、存続に向けて進めていってほしいということは、これは言うまでもないんですけども、昨今の気象状況を鑑みると、なかなか大雨、線状降水帯とかが急に発生して、気象庁もなかなかすぐにはキャッチすることができないという状況の中で、大雨が降ったときに交通機関がストップすることがありますよね。そういうようなことを考えたときに、大糸線を観光路線という重点項目に加えて、物資輸送をする路線としての役割も担えるのではないかというふうに個人的には考えます。専門的な要素が関わってくるものではありますが、いかがお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

五十嵐都市政策課長。　〔都市政策課長　五十嵐博文君登壇〕

○都市政策課長（五十嵐博文君）

お答えいたします。

大糸線だけで考えると、ちょっと気象に対しては、逆にちょっと道路より弱いんじゃないかなという側面はあるんですが、今の議員のご質問の中の物流、物資輸送という部分に関しましては、これも報道でもございましたが、物流の２０２４問題によるドライバーの運転時間の適正化とかいうことが、もう直前に、問題に迫っています。そういう物資輸送に位置づけてはというご提案、これまで私ども生活とか観光という切り口で取り組んでまいりましたが、そこに物流という要素を加えてはどうかというご提案は、受け止めさせていただきます。

ただ、これは以前にも私どもで検討、市長指示等を受けまして検討したことがあるんですが、やはり現状の鉄道基盤の整備水準が、貨物を引くディーゼルの機関車に耐え得るかというところが、かなり貧弱でございます。

もう一方、荷物を運ぶだけではなくて、それの取り卸しをするような拠点ターミナルというのをどうするかというところも必要でございます。そういう様々な課題はございます。

当面は、大糸線の確保に向けまして、まずはお客様を増やす取組というのを着実に行って、その成果を積み上げていくというところが、まずは私たちがやる仕事ではないかというふうに考えておるところでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

大糸線応援隊のファンミーティングの１日目、８月１９日、１日目が終了した後の信濃大町周辺の気象状況、これは大雨が発生しまして、松本から長野方面の特急しなのが全便、その夕方から１日、終日運休というようなことがありました。同じ時間帯に、上越線ですけれども、水上から沼田の間が、日中から五、六時間以上運転見合わせと。最後は、最終的に数本通したようですが、いつ、どこで、どういうような大雨が発生するか分かりませんし、どういうような災害が発生するか分かりませんので、今ほどの答弁によりますと、非常に厳しい状況があるということは承知しましたけれども、そこの部分もちょっと諦めずに研究する余地があるのではないかというふうに思います。これは、貨物輸送ではなくて観光路線といいますか普通の鉄道ですが、同じＪＲ西日本の氷見線ですけれども、富山県内を走ってるところですが、これも大糸線と同様に非電化区間です。

そこで、非電化区間を電化する動きがあったんですけれども、やはり莫大な費用がかかるということで断念した後、それで諦めるのではなくて、発想の転換を図って、新しい車両を導入するという方向で、ＪＲ西日本、富山県、沿線自治体の高岡市と氷見市で協議して、そちらの方向を決めております。ですから、これが駄目だからといって諦めるのではなくて、いろんな選択肢を模索しながら、何とか存続に向けて動いていただきたいと思います。

次に、以前の私の一般質問において、糸魚川駅の役割についてお聞きしたことがあります。答弁としては、糸魚川駅は北陸新幹線と大糸線、地元の交通機関との重要な結節点であり、ターミナル駅としての機能を有する駅だということをいただいておりますが、これまでも行政として利用促進に向けて様々な取組をしてきたと思いますし、今回のファンミーティングでの提案を沿線自治体やＪＲ等に共有していくとのことですが、新幹線の延伸は、もう来春に迫ってます。半年後です。

なお、また大糸線もＪＲや国に対しての明確な実績が示されていかないと、当市にとってはかなり厳しい状況、現実を見ることになるかと思いますが、いかがお考えでしょうか、お聞かせください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

五十嵐都市政策課長。　〔都市政策課長　五十嵐博文君登壇〕

○都市政策課長（五十嵐博文君）

お答えいたします。

これまでの私どもの取組では、ご利用者数の伸びにつながっていない、今年度の私どもの調査ですと、わずか微増でございます。そこはご指摘のとおりで、ＪＲの動き、国の動きからすると、今議員のご指摘というのは、私どもも同様に厳しくちゃんと受け止めております。

一方、大糸線、先ほどのあちこちで線状降水帯があるとかいうことで、やはりつながっていて、ネットワークを形成する路線であるということがやはり大事なのと、もう一個は新幹線の停車本数に、今は敦賀の少し暫定的な開業ですけど、それが関西に伸びていくという新幹線です。そのためにも、本当にあの数だけではない効果的なものによって新幹線を残していく筋道を、沿線一緒になって探さないといけないですし、その前にも、私どもの取組、鳥塚さんもおっしゃっておられた鉄道ファンの力を借りるなら借りて、使って、今の５５人、５９人というのを右肩上がりに持っていくところをＪＲに見せるということが必要なことだというふうに考えております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

やはり行政としては、たくさんのお客さんに乗ってもらうという、そういうところに力を入れていかざるを得ないというふうに思います。

ただ、ＪＲの考え方としては、鉄道の使命は大量輸送だというふうに言っていますけれども、そこのミスマッチがこういうふうなことを生んでると思うんですよね。ですけど、やはり行政としては、観光資源を利用した利用客の増員といいますか増加が、一番の力の入れどころだということですので、実績を踏まえながら、やはりどんどん、どんどん国やＪＲにこれだけやってるんですということを遠慮なくやっぱりＰＲしていくことが、存続に向けてのものかと思います。

先ほどの答弁の中にも、要するに観光地への経由地的なそういう答弁もちょっとあったんですけども、市長答弁の中では、やはり糸魚川に来ていただくという、そういうこともありましたので、ぜひその２つを併せて、力を注いでいただきたいと思います。

もう今は大糸線の存続については、もう待ったなしの状況にあります。もう来年度に移行すると国やＪＲが、言い方はちょっと悪いですけど、大糸線にちょっと見切りをつけるというか、そういうような段階になることもちょっと危惧されますので、何としても力を入れていただきたいと思います。私も一市民、一鉄道ファンとして、利用できるものであれば、できるだけ利用していきたいと考えております。

次に、地元のえちごトキめき鉄道なんですけども、６月に雪月花が、上越妙高駅から長岡小出を経由して、ＪＲ只見線に乗り入れて、会津若松まで運行されています。これはＪＲ只見線が、２０１１年の７月だったでしょうか、新潟・福島の豪雨で一部区間が災害を受けて、ほぼ１１年ぐらい不通の状況になっていたのが、昨年１１年ぶりに開通した。そこに乗り入れたものです。８月には、土日に運行されている観光急行が、かつての急行立山として、直江津・富山間を１往復だけ臨時運行されてます。このどちらも満席状態で、運行される前まではキャンセル待ちが出るほどでした。また、乗れない方といいますか、沿線においても、住民の方々をはじめ、鉄道ファンの方々で盛り上がって、反響はすさまじかったというふうに聞いております。

このような状況を、行政としてはどのように受け止めて、新幹線や大糸線の利用促進に向かって生かすことはないのか、どのようにお考えなのかお聞かせください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

五十嵐都市政策課長。　〔都市政策課長　五十嵐博文君登壇〕

○都市政策課長（五十嵐博文君）

お答えいたします。

えちごトキめき鉄道の取組というのは、私のような鉄道の素人から見ても新鮮・斬新というような取組で、その辺の学ぶというところは、議員ご指摘のとおりだと思います。これまで雪月花は、毎年秋に１回、大糸線に乗り入れておりまして、お客様から好評いただいてるだけではなくて、実

際には乗っていただけないんですが、それをカメラに収めようと、撮り鉄と呼ばれる鉄道ファンが多く来ていただいてます。これもある意味、経済効果であると思います。

また、観光急行というのは、毎週末、市振駅まで２往復走っておりまして、議員からは、市振駅周辺等で周遊できる取組というのをやってはどうかというご提案を受けているところでございます。

それ以外にも昨年実施した１１０周年のＳＬというのは、これは多くの鉄道ファン以外にも響くような取組ですので、そういうえちごトキめき鉄道の取組というのを今後大糸線につなげれる、つなげれん別にしても取り込んでいきたいというふうに考えております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

１つ目の質問については、これで終わりとしますが、廃線の憂き目を見たり、定期運行の列車が停車する本数が減らされてからでは、元の状態に戻すということは、それこそ至難の業です。ＪＲからえちごトキめき鉄道に移行したときでも、糸魚川と新潟を結ぶ快速列車が走っていましたが、それが廃止されてからは、なかなか復活するのは難しいという、今現状があります。

そういうようなことも、実際に私も見たり聞いたり、新聞報道等で聞くことがあります。ですから、やはり糸魚川というこの駅が、交通の要衝としてしっかり機能していくためには、これまでの取組の成果と課題を、行政として、いま一度しっかり精査して、でき得る限りの情報発信に努めていただきたいというふうに思います。

次に、２つ目の生涯現役社会に向けた高齢福祉施策について再質問いたします。

まず、シニア層向けの就職支援窓口の当市独自の設置は無理だとしても、ハローワークと連携して、常設あるいは巡回相談などの形で、シニア層向け窓口の近くにハローワークの窓口を設置することはできないでしょうか、これについて伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

大西商工観光課長。　〔商工観光課長　大西　学君登壇〕

○商工観光課長（大西　学君）

お答えいたします。

今、行政のほうでは、ワンストップサービス等の窓口は広がっております。今ほどのご提言のハローワークの窓口の設置につきましては、やはりハローワークの考え方次第だとは思いますが、私らが考えてみるに、結果的に相談窓口で完結できなければ、ハローワークへ改めて出向くことにもなりかねず、余計なワンクッション、手間等、増えるものになるのではないかなというふうに考えております。将来的に国や県、市など、関係者が一緒になった総合行政庁舎的な運営形態が考えられれば、より可能性はあるのではないかなというふうに思っております。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

次に、福祉事務所やシニア層に係る担当部署、ハローワークやシルバー人材センター等が、シニア層の就労支援や社会参加の支援を行うために、シニア層や企業のニーズなどを情報共有する機会を設けることはできないでしょうか、伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

磯貝福祉事務所長。　〔福祉事務所長　磯貝恭子君登壇〕

○福祉事務所長（磯貝恭子君）

おはようございます。

お答えします。

シニア層の就労という部分では、シルバー人材センターが大きな役割を担っていると考えております。シルバー人材センターは、働きたいという方のニーズ、それから利用されたいというニーズをマッチングさせることをしておりますので、その社会の動向なども、情報が、シルバーのほうには、把握しておりまして、市のほうとも情報共有を図っているところでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

今、再質問を２つさせていただきましたけど、シニア層の就業相談窓口の設置とか、シニア層と企業のニーズの情報共有については、シニア層の方々が、何かを始めたいけど、誰に、あるいはどこに相談していいか分からないという方々の対応のためということで提言させていただいたわけです。ほかの議員の方も、以前に大西課長の答弁の中にもワンストップ窓口ということをおっしゃっていましたが、そのようなシステムの窓口を設置することによって、シニア層の就業意欲にも大きく貢献できるんではないかと思って提言させていただいたところですので、ご検討いただければというふうに思います。

次に、私の座右の銘といいますか好きな言葉の中に、これも以前一般質問で述べさせていただきましたけども、二宮尊徳の積小為大という言葉があります。小さなことを積み上げていって、大きなことをなすという、そういう意味ですが、私の場合には、大きなことをなすというよりは、こつこつと小さなことを積み上げていくところに感銘を受けているところであります。

そこで、多忙を極める自治体業務の中で、シニア層が人のお役に立てる形での生きがいづくりを支援するのはどうかなというふうに思います。これも難しい面があると思いますけれども、どんなに小さなことでも、何かできることはないかなというふうに私は思いますが、いかがお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

磯貝福祉事務所長。　〔福祉事務所長　磯貝恭子君登壇〕

○福祉事務所長（磯貝恭子君）

お答えいたします。

生きがいと言っても、生きがいは本当に人それぞれで、いろんな広いものがあると思います。先ほどシルバー人材センターのお話をさせていただいたのは、就労という切り口で、生きがい活動ということにつながるかと思いますが、例えばデイサービスに通われてる方が、いろんな日々の活動の中で作品を作られて、それを市の作品展に展示をして、地域の方も喜ぶ。また、もちろん作られた方も、見に来られて喜ぶというところもあります。いろんなことが生きがいの支援につながっているというふうに考えております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

各関係機関等で連携を深めている例として、千葉県の柏市での例が挙げられます。

柏市は、人口４３万人ということで、糸魚川市の人口の１０倍以上、かなり大きな人口を持っておりますけども、この柏市では、主に５５歳以上の市民に、地元求人、ボランティア活動、学習活動、健康づくりに関する情報をワンストップで提供できる、かしわ生涯現役窓口というものを設置しています。

これは、市や地域の関係団体で構成する非常に大がかりな事業ではあります。名称としては、柏市生涯現役促進協議会というものです。こういう取組を、市の人口規模はかなり違いますけれども、こういうものを参考にしてみるのもいかがかなというふうに思います。やはりいろんな関係機関と連携をすることによって、やはり何かお役に立ちたいというような、６５歳以上の方々の意識を高めるということも行政としては必要ではないかというふうに思います。

次に、介護事業についてですけれども、読売新聞の記事に、介護を受けている方の中に、その日、お茶と水のどちらがいいか、ただ自分が言われるんじゃなくて、介護を受けている方が自分で意思表示して、職員の方のことを助けるとか、配膳を手伝うとかというような役割の細分化、要するに一人一人の意欲や能力を見極めて分担するという事例が紹介されています。有償ボランティアの形は無理でも、各事業所で、ささやかであっても利用者が職員の方々の役に立てる機会をつくることで、少しでもシニアの方が生きがいを得られるよう、自治体として事業所に対して啓発活動は行えないものなのか、お聞きいたします。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

磯貝福祉事務所長。　〔福祉事務所長　磯貝恭子君登壇〕

○福祉事務所長（磯貝恭子君）

お答えします。

今議員がおっしゃられるように、介護サービスを利用されている方が、その事業所において作業活動や有償ボランティア活動をするということで、地域に貢献しようという取組は広がっているところです。糸魚川市のほうでは、例えば一部のデイサービスでは、機能訓練の一環として、商品のラベル貼りをお手伝いしたり、新聞紙を畳んだりするという例もございます。そのような取組につ

いては、また事業所内、事業所間の中で共有できるようにしていきたいと思っております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

介護事業の場合は、えてして生きがいづくりというか、お世話中心のサービスになりがちです。これについても岡山県岡山市においては、要介護状態になっても、いつまでも住み慣れた地域で生きがいを持って暮らしていけるように、介護事業所で就労、社会参加活動が可能となるような取組や啓発活動等を進める高齢者活躍推進事業「ハタラク」というのを実施しています。

ハタラクというのは、カタカナでハタラクと書くのですが、ハタラクに関して、これも５月９日付の読売新聞の報道では、歩くことが好きな人には、地域内を散歩しながら、ダイレクトメールを投函してもらうとか、あるいは庭仕事が得意な人には草むしりをしてもらうなど、その人のやりたいことやできることに合わせて取り入れていると報じられています。このように、要介護や要支援の状態になった人でも、どなたかのお役に立って、生きがいを得ることは、考え次第ではできるのではないかというふうに私は個人的に思います。

現在、令和５年度の時点で、国の高齢社会対策関係予算というのは、一般会計で２３．６兆円ほどになっています。あわせて、特別会計も入れると５５．５兆円となっています。これだけ多額の国費が投じられているのですから、こうした予算が、真にシニア層の方々の生きがいを生み出して、幸福の実現のために投じられていくべきではないかというふうに思います。

私は、今回のこの生涯現役社会に向けた高齢福祉施策について、いろいろと考えさせられたことがあります。生きがいと一口に言っても、先ほど磯貝所長もおっしゃいましたけど、その生きがいというのは、それが仕事なのか、ボランティア活動なのか、地域活動なのか、あるいは何か別のものなのか、人それぞれであると思います。そういうことを踏まえまして、現実には、少子高齢化が本格化する一方で、厳しい財政状況が見込まれる中、シニア層の方々が生きがいを持って生涯現役で活躍されることは、より一層重要になってくるのではないかと思われます。現在働いている６５歳以上の割合は、全国平均で２５．３％、これは昨年度、２０２２年度ですが、糸魚川市でも２４％台を保っておりますので、糸魚川市も、やはりお元気で働けるような、そういう方々が多いということですね。

かつては、この割合が実は３３．６％という、そういう数字を打ち出してることもあるんですよね。ましてや、現在シニア層の方は、日本老年学会等で７５歳以上を高齢者と再定義するというような、そういう提言がなされていて、最近の２０年では、１０歳ほど若返っているというふうに見られています。これらを考えれば、もっと生涯現役で活躍できる方はいらっしゃると思われます。現に私の身近なところで、私が参加している糸魚川シニアソフトボールクラブのメンバーは、私が６０歳で一番年下で、７０歳代の方でも主力で活躍されている人がいらっしゃいます。ですから、まず、生涯現役人生を可能だと考える思考から始めていかなければならないのかなというふうに思います。

日本老年学会の提言もありますが、やはり７５歳ぐらいまでは普通に働ける社会、元気な人は生

涯現役で働ける社会を目指すことが大事だと思っています。そして、そうしたシニア層の活躍を支えるためにも、新しい産業を起こしたり、まちを活性化したりすることで、仕事を創造していくことも必要ではないかと思います。幾らやる気のあるシニアの方々がたくさんいらっしゃっても、それを吸収して、付加価値を生み出していく受皿がなければ、シニアの方々のやる気を十分に生かすことができないというふうに思うからです。

また、シルバー人材センターの例も挙げられていますが、これは生きがいというのは収入の多寡、多い少ないではなくて、やはり世の中のお役に立つということ自体が幸福感を生み出して、できるだけお役に立ち、生きがいを感じられるようにシニアの方々を支援する事業を自治体として展開していくべきではないかというふうに思われますが、米田市長、いかがお考えでしょう。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

米田市長。　〔市長　米田　徹君登壇〕

○市長（米田　徹君）

お答えいたします。

非常に高齢化社会の到来によりまして、いろいろな諸問題が起きておるわけであります。やはり生涯現役であったり健康寿命で、市民生活をされることがやはり一番大切であるわけであります。それには、ただやはり個人の健康管理だけではなくて、働くという一つの事柄が大きな事柄になるんだろうと思うわけでございますので、議員ご指摘のように、我々はこれからの中で、どのような働く場の、また働く場といいましょうか、そういった活躍できる場、働く場というのは、どのようにあるかというのをやはり考えなくてはいけないかなと思っておりますし、できれば、この集落単位、公民館単位などでいろいろ検討していただく中で、その地域地域に合った高齢者の皆様方がご活躍できる事柄というのはあるんではないかなということを考えながら、今のご質問をお聞かせいただきました。ぜひともそういった、我々は高齢化社会の最前線を行く市でございますので、そういったところをまた職員と検討していきたいと思っております。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（松尾徹郎君）

和泉議員。

○１３番（和泉克彦君）

ありがとうございます。

最後に、超高齢社会を生きる今、生きがいというものを軸にシニア向けの事業を見直していくべきだと考えております。言い換えれば、シニア世代のお一人お一人が誰かのお役に立ち、幸福感を深めていけるよう事業そのものの考え方も変えていく必要があるのではないかと思われます。

利用される方々においては、何々してもらうということだけではなくて、いろいろな環境はあると思いますけど、誰かのお役に立つ幸福感を工夫して伝えていくことが大事ですし、行政側も福祉施策について歳出を膨らませてですね、現役世代や将来世代に負担を残していくということだけは控えていただきたい、抑えていただきたいと思います。

以上で、私の一般質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（松尾徹郎君）